

# 小玉重夫『難民と市民の間で ——ハンナ・アレント『人間の条件』を読み直す——』

石 神 真悠子

## 1 はじめに

本書<sup>1)</sup>『難民と市民の間で——ハンナ・アレント『人間の条件』を読み直す——』は、ハンナ・アレント研究の第一人者である小玉重夫がアレントの主要著作である『人間の条件』を、『全体主義の起原』との関係や現代的課題と絡めながら検討したものである。

ハンナ・アレント(1906-1975)は戦前にユダヤ人としてナチスから迫害を受け、戦後はアメリカに亡命して活躍した女性思想家である。1951年に全体主義を痛烈に批判した『全体主義の起原』を、1958年には『人間の条件』を出版し、政治的世界における「公共性」の重要性を強く打ち出した。

本書では、アレントが『人間の条件』において、人間の公的な活動の条件がなぜ近代に失われていったのか、あるいは、完全になくなならないにしても、なぜその位置が低くなっていったのかを、「社会的なるもの」という概念に着目して分析している。さらに現代社会において人間の公的活動が再開される条件と可能性、その見通しについて、『人間の条件』のもっとも重要なキーワードである「出生(nativity)」という概念に着目しながら、現実的なものとして提示されつつあることを示していく。現代社会におけるアクチュアルな問題関心との関わりにおいてアレント思想を読解するといった手法がとられている点で、アレントの難解な著作を読み解く上での入門書であると同時に、著者独特の切り口からアレント思想をとらえ直すことが試みられている点で、示唆に富んだ専門書でもある。

章構成は次の通りである。

序 章 思想的事件としての『人間の条件』

第1章 忘却の穴

第2章 退きこもりの政治性：人間の思考活動

第3章 行為者の自己開示：人間の政治活動

第4章 社会的なるもの

第5章 出生

終 章 難民と市民の間で

## 2 本書の概要

### 第1章 忘却の穴

アレントは『全体主義の起源』において、国民国家が難民を構造的に生み出すという全体主義の特徴を指摘し、全体主義下での大量虐殺は、単なる生物学的な生命の剥奪以上のものを意味していたという。つまり、ユダヤ人というアイデンティティやその存在自体を、歴史の記憶から抹消してしまい、この世に存在していたことが全くなかったかのように消滅してしまうこと。そこに落ち込むことを、アレントは「忘却の穴<sup>2)</sup>」という言葉で表現した。

小玉はさらに現代に目を向け、アレントが描く難民を再生産するシステムである全体主義の特徴が、今日に至るまで継続していることを指摘する。たとえば、フリーターやニート、スクールカーストの問題に代表されるような、社会的に排除される若者たちの貧困、格差の問題を挙げ、こういった事態が、アレントが『全体主義の起源』で用いた「忘却の穴」という概念につながるのではないかと述べる。上記の例の他にも、現代の日本の格差社会を批判的に論ずる雨宮処凛と、哲学者であり運動家である杉田俊介との対話において社会的に排除される若者たちの貧困や格差の問題を「忘却の穴」という言葉で表す例を挙げ、日本の現状が、アレントが述べていた事態と重なると小玉は指摘する。

「忘却の穴」を乗り越えるうえでアレントが参照したのは、ポリス(都市国家)を公共性の単位とした政治が行われていた古代ギリシャでの世界であった。アレントは「公的」という言葉を次のように説明する。

ここでまず、「現れ(appearance)」が公共性を考えるときに重要視されなくてはならない要素だと言う。つまり、公的に現れて、「他人によっても私たち

によっても、見られ、聞かれる」ということが、公共性の要件としてとらえられている。それは、公的に現れることこそが、忘却の穴に落ち込まないための条件であるからである。ここで少しアレントの言葉を引用する。

第一にそれは、公に現れるものはすべて、万人によって見られ、聞かれ、可能な限り最も広く公示されるということの意味する。私たちににとっては、現れがリアリティを形成する。この現れというものは、他人によっても私たちによっても、見られ、聞かれるなものなのである。(『人間の条件』p.75)

第二に、「公的」という用語は、世界そのものを意味している。なぜなら、世界とは、私たちすべての者に共通するものであり、私たちが私的に所有している場所とは異なるからである。しかし、ここでいう世界とは地球とか自然のことではない。地球とか自然は、人びとがその中を歩き、有機的生命の一般的条件となっている限定的な空間にすぎない。むしろ、ここでいう世界は、人間の工作物や人間の手が作った製作物に結びついており、さらに、この人工的な世界に共生している人びとの間で進行する事象に結びついている。世界の中に共生するというのは、本質的には、ちょうど、テーブルがその周りに坐っている人びとの真ん中に位置しているように、事物の世界がそれを共有している人びとの真中 (between) にあるということの意味する。つまり、世界は、すべての介在者 (in-between) と同じように、人びとを結びつけると同時に人びとを分離させている。(『人間の条件』pp. 78-79)

この公共性の第二の意味は、共に生きている複数の人々の間で (between) 進行する事象を示している。つまり、複数の人々がそこにいて、そこで何かが行進する、そしてそれによって、「人びとを結びつけると同時に人びとを分離させている」、そういう世界そのものなのだとアレントはとらえる。忘却の穴に落ち込まないために、人々の間で忘却されることなく、人々の間に現れることが可能になるためには、組織された記憶の場所が必要であり、それこそがま

さにポリスなのだという。

## 第2章 退きこもりの政治性：人間の思考活動

この「忘却の穴」を回避するために、アレントは人間の二つの活動様式を想定した。それは思考活動と政治活動である。小玉によれば、アレントは、マルクス批判を通じて哲学と政治の関係、つまり人間の思考活動と政治活動の関係をとらえ直そうとしたという。

アレントのマルクス批判には、二つの論点がある。一つは、二重の脱政治化—哲学的思考の脱政治化と労働者の脱政治化—が、それ以降の全体主義の思想的脈絡を形成するとして捉えている点である。まず哲学的思考の脱政治化とは、ポリスの終焉と関わる。ソクラテスは哲学的思考に基づいて、ポリスの中での政治を尊重したが、プラトンはポリスの中の政治よりも、政治そのものを指導する哲学に重きをおいた。その結果、ポリスの終焉を招いた。しかしマルクスにおいても、このポリスの終焉による脱政治化された哲学は引き継がれ、哲学が政治を指導するという枠組みが維持される。つまり、労働者が政治参加の主体としてではなく、前衛党による指導の対象として位置づけられる点、そして政治が党官僚によりテクノクラート化し、他方では、迫害からの抵抗と防衛を企図した秘儀的な著述の技法が発展していく。アレントはまさにこの二重の脱政治化において、全体主義の思想的脈絡をとらえたのであると、小玉は指摘する。

そこでアレントは、プラトンよりも前のソクラテスまで回帰し、哲学的思考の意義の問い直し、再政治化を試みたのだと小玉は言う。その際指摘するのが、論点の二つ目である哲学的思考・余暇の重要性だ。つまりアレントは、ソクラテスに始まる哲学の本来の役割を、ポリス的世界から退きこもり、自由時間と余暇を使って思索することに見出したのだ。ポリス的世界からの退きこもりによって思考がなされるという余暇の意義を主張する。

## 第3章 行為者の自己開示：人間の政治活動

アレントは、忘却の穴を回避するために想定した二つ目の要素として、人間の政治活動によって行為者が自己開示されるという観点から「活動」に着目した。

アレントは、人間の条件、すなわち人間の活動力

を「活動的生活 (vita activa)」という用語で表すが、その構成要素として「労働」「仕事」「活動」の三つを挙げる。「労働 (labor)」は、人間の肉体の生物学的過程に対応する活動力であり、生命それ自体が人間的条件となるものを指し、「仕事 (work)」は、人間存在の非自然性に対応する活動力であり、人工の世界を作り出すものを指す。そして「活動 (action)」とは、物あるいは事柄の介入なしに直接人と人との間で行われる唯一の活動力を指し、その特徴は「複数性 (plurality)」に根ざすことにある。「複数性」が条件であることは、前者ふたつと大きく異なる点であり、この活動こそが政治的行為に固有の特徴だとアレントは言う。

そして、この「活動」において最も重要な側面は、その人が「何者 (who)」であるかを人々の間で開示するということだ。どんな職業に就いているか、や、何の仕事をしているかという「なに what」ではなく、具体的な固有名詞を持つ存在として公的世界に現れなければ「何者 who」として認識されることはない。そしてそのためには「活動 (action)」が必要であり、それは言葉と行為がなければできないという。

アレントの政治的行為論を見て行くうえで重要なポイントとして小玉が主張するのは、同質的な絆で結ばれた同胞愛と、不均等で異なるもの同士が関わり合う友愛を区別する点である。同胞愛 (fraternity) は、ある種の同質的なつながりに基づく結合であり、公共性を創出しなない。そうではなく、複数性に基づく異質なもの同士が共に存在する世界を、アレントは、同胞愛と区別して、友愛 (friendship) と表現した。友愛における政治的要素とは、誠実な対話において、友人同士が互いの意見に内在する真実を理解しあうことができるということである。

これをふまえ、小玉は、今日的課題に照らし合わせたとき、私たちの社会や、私たちの周りの公共的世界の生きにくさ、ある種の不自由さは、友達関係を、異質性ではなく同質性に支配されたフラタニティとして捉えてしまうことと重なるのではないかと指摘する。こういった世界では、人がどう思っているかということへの気遣いや、その場を支配している空気をどう読むか、ということで公共的空間が維持される傾向があると言える。そうではなく、空気を読む公共性とは違う形、つまり、活動＝アクション・演劇的行為を通して人々の前に現れることで公共性を樹立できないか、ということが『人間の条件』

のテーマとなると小玉は言う。

#### 第4章 社会的なるもの

小玉によれば、アレントはその公共性を担う市民の条件として人間の思考活動と政治的活動を想定するが、18世紀から19世紀の近代においてそれらが失われて行った、あるいは完全に無くならないにしても、その位置がかなり低くなっていったと強調するという。アレントはそれを公と私概念を対比し、近代を「社会的なるものの勃興」として把握する。

古代の公的領域は、生命の維持、再生産が行われる家族の領域 (私的領域) からは独立した、それ自身として価値を持つ自律的領域であり、私的領域としての家族は、公的領域での善き生活の実現に奉仕する手段的な地位に置かれていた。ところが、近代 (18-19世紀) になるとその地位が逆転する。つまり、社会的なるものの勃興によって、「生命の維持のためにのみ存在する相互依存の事実が公的な重要性を帯びた結果、私的な領域から自立していた公的な領域が消失したと捉えている。それをアレントは「社会的なるものの勃興」による公私の区分の崩壊という図式で把握する。ではアレントが考える公的領域とは何か。第一に自由 (freedom) が実現する領域である。特に、生活の必要一つまり、金銭的問題に限らず、食べる、食事を作る、家事労働など生命の維持に関する事、そして子どもを産み育てることから解放されている点に自由の意味を求めていることが重要である。第二に、それが共通世界 (common world) に関わる領域であるということだ。アレントによれば、「公的」という用語は、世界そのものを意味しており、その「世界」は、複数の人間が存在する世界を結びつけながら分離させる要素を併せ持つものである。

このような性質をもつ公的領域の消失により、二つの帰結が挙げられる。まず、「平等」という概念の変化だ。かつての公的領域では、異質な価値観を持つ同格者としてかかわり合うという意味でとらえられていた平等は、社会的なるものの勃興の結果、単一の尺度によってはかられる画一的な平等へとその意味を変質させていく。

二つ目は、人々を結びつけると同時に分離していた「共通世界の解体」をもたらすという点である。公的領域が失われた後、人間存在の共通性を担保するものとして貨幣が登場するが、これにより「複数

性 (plurality) という人間の条件」が担保されるべき共通世界は、その存立基盤を喪失してしまうのだ。

このようなアレントの近代批判から、小玉は、「社会的なるもの」に含まれる近代教育の論理を抽出する。まず、近代の特徴として、子どもを産み、育てるという生命の維持と再生産に関わる行為が近代において公共的な意義を獲得していくことが挙げられる。こうした中、アレントは子どもの教育について二つの側面があることを示す。第一は子どもに生命を与えること、第二は子どもを世界に招き入れるということである。しかしこれらは必ずしも調和的に共存可能なものではない。アレントは、「子どもは、妨げられることなく成熟するために、安全な隠れ場所を本性上必要とする」(『過去と未来の間』p.253) と言うが、それを確保できるのは私的領域である。それに対し、子どもを世界に導くためには別の機関が必要であり、それが学校であるとアレントは考える。そして教育を、子どもの中にある新しいもの(=異文化)を保持しながら、新しいものとして古い世界に持ち込むことを指し、子どもは未完成の大人としてではなく、「世界への新参者」=他者としてとらえようとした。

しかし近代社会は、生命を最高善とみなすことにより、近代教育は子どもの福祉への社会的関心を増大させ、児童中心主義が台頭することとなる。これは、「子どもの世界が絶対化され」、「子どもの独立を尊重するという口実のもとに、子どもは大人の世界から締め出される」(『過去と未来の間』p.248)。生存的価値やその体現者としての子どもの世界の絶対化、普遍化は、古い世代の側がそうした側面に屈服する(=古い世界への共同責任を引き受けることを拒否する)ことを媒介として、共通世界の解体、破壊を促進していくとアレントはみる。新参者=他者としての子どもを世界に導き入れ、共通世界を維持、存続させていこうというアレントの教育認識は、近代教育が持つ普遍化志向性に対する一つの批判の論理を提供するものであると言うことができる。小玉は指摘する。

## 第5章 出生

こうした公的世界の複数性が維持されるための条件として、『人間の条件』で最も重要なキーワードとして、「出生」がある。

アレントの「出生」概念は、新参者を公的世界に

招き入れる営みとして捉えるという教育認識のもとにある。これまでの解釈では、アレントのギリシャ思想による影響を指摘されてきたが、このような「出生」による世界更新が公共的な世界の存続と更新にとって決定的に重要な意味を持つことは、ユダヤ、ヘブライ的思想に依拠している所以であると小玉は指摘する。

この際、出生によってこの世に新参者として到来することは、すでに存在するものに遅れて参入することである。このような新しい存在としての未来を代表する子どもと、現存在する世界との架橋が、教育や学校の中で作られるとき、そこに立ち会う媒介者としての教師の役割はいかなるものであろうか。過去と未来の裂け目のただなかで、そのいずれをも特権化することなく、その両方に対して応答的な立場を確保しようという戦略であり、これに位置づくものこそ、教える存在としての教師にほかならない。そこで教師は、進歩主義のように子ども中心の立場に立つのでも、保守主義のように過去の伝統を特権化するのでもない、その間に立つ姿勢が求められる。

こういった観点から小玉は、英米で近年注目されているシティズンシップ(市民性)教育の有用性を示す。シティズンシップ教育では、科学は専門家によって独占される知としてではなく、専門家ではないアマチュアの市民の知である市民科学(Civic Science)として捉えられる。その際、市民がそのような存在になるために政治的判断力(政治的リテラシー)を養成するのがシティズンシップ教育である。ここでは、社会的・政治的判断を行うのは民主主義社会の構成員である市民自身であるということを明確にすること、そしてそこで論点・争点になっていることは何かをしっかりと教え、考えさせることが重視される。つまり、シティズンシップ教育においては、「論争的問題」を教育することで「争点」を理解し、政治的リテラシーを高めることが重視される。これは、出生概念に依拠して過去と未来を媒介するアレントの教育論と通底するものである。この橋渡しの役割を教師が担う際、教師自身もまた無知な市民でありながら、そのことによってむしろ過去と未来を媒介する者となりうるのではなかろうか。これまでの議論を踏まえるならば、それは難民性と市民性を同時に引き受ける存在であるとも言えよう。ここにおいて、公共性を担う市民の活動の始まりを秘めるものとしての教育の可能性が示唆されつつ論が

閉じられている。

### 3 コメント～「難民と市民の間で」にこめられた意味～

本書の独自性を特に挙げるとすれば、それは、アレントの「忘却の穴」を現代の問題につなげたことだろう。例えば、雇用状態の不安定さや子どもたちにおけるいじめ・スクールカーストといった問題は、私たちのほとんどが、多かれ少なかれ、社会から見捨てられ、孤立 (loneliness) している—こういった状況を小玉は、すべての人間が難民的な要素を抱えながら生きているのではないかと指摘し、アレントはそういった現在の状況を見通していたとすら読むことができるのではないかとその先駆性を指摘する。

現代社会の例として『スクールカースト』(鈴木翔、光文社新書、2012) と映画「桐島、部活やめるってよ」が挙げられている。学校に存在する「スクールカースト」による生きづらさ、そしてそれにより存在すら「忘却」されてしまうような状況を示し、人々が抱える難民性を指摘する。下記に引用を示そう。

同じクラスにいる「気がする」。

つか映画部なんて「あったんだ」。

カースト上位から見れば映画部は存在していない。映画部という存在自体が記憶されていない、見捨てられているのだ。存在が忘却される穴、そしてその穴に落ち込んでいく存在、さらにそのことが公衆に晒されている象徴的シーンだ。このようにみていくと、スクールカースト問題はまさに、難民化している生徒の存在を照射していると言えるだろう。忘却の穴に落ち込んで行く状況、周りから見捨てられる状況は、狭い意味での歴史的、政治的な問題であるばかりではなく、現代の私たちの日常生活、学校教育の場に侵入してきていることがはっきりわかる。(p.37)

たとえば、90年代から社会問題となった“ひきこもり”。ひきこもりは、悩みや葛藤から自分を守るために“ひきこもるのだ”とも言われている。この問題には様々な背景があるが、その一つに社会構造との関連で次のような指摘がある。「彼/彼女らを追い

詰めているのは、ひきこもっていること自体ではない。そのことを否定する他者のまなざし、そして当事者自身のまなざしなのである。そのようなまなざしが喚起する精神的苦痛から、彼/彼女らは己を守ろうとしているのではないか。言うなれば、彼/彼女らは『ひきこもり』を白眼視する社会によってひきこもらされているのではないか。」(石川、2007、p.103)

つまり、内面的な悩みや葛藤によって内にこもるだけでなく、“ひきこもり”を認識しない・見ようとしなない“白眼視”された社会によってひきこもらされていると指摘している。これを先の例と併せて鑑みると、「忘却の穴」に落ち込むのは、内面と外面の両方からの圧力によって“陥らされている”と言えるのではないだろうか。

もちろん現代的な問題と、アレントの論を結びつけるにはさらに厳密な研究が必要かもしれない。しかし、小玉が指摘するように、アレントの著書を現代の私たちが抱える問題と引きつけて読むことで、アレントの論旨がより際立って浮かび上がってくるように思える。

では、この忘却の穴を回避するにはどうしたら良いのか。打開策のひとつに、「難民性」を理解することがあるかもしれない。小玉が示唆する「難民性」とは、社会から見捨てられ、孤立している状態を指すだけでなく、難民として社会から退きこもることによって、自由時間を得、思考することが可能になるという。つまり、厳密には「忘却の穴」に陥ることと、「難民化する」こととは必ずしも一致しておらず、難民性を必ずしも否定的なこととして見てはいない。ではこのように難民化することで、例えば「スクールカースト」のような社会から脱却し、「自由」を獲得することができるのではないだろうか。カースト下位の「映画部として」や社会問題として顕在化された“ひきこもりとして”社会に現れるのではなく、映画部の○○(固有名)として、ひきこもりだった過去を持つ○○(固有名)として現れることができるということだ。

その際重要になる視点は、アレントの「社会」に関する重層的な認識だろう。アレントは、難民であること、市民であることの間にもう一つ「社会」というものを設定し、それは小玉によれば、職業に就くことや地域の共同体に参加することなど、人間が生きていくうえで必要な世界を指すという。それは、「社会的なるもの」すべてを批判しているのではな

く、現代の日本社会でよくおこる「空気を読む」ことへの過剰な関心、学校や職場での「つながり」への同調圧力といったものにつながる“社会的なるものの肥大化”を批判する。つまり逆説的に「社会から退きこもる自由」を積極的にとらえ、「市民として公共的場面で発言していくことの自由」を取り戻していく可能性を秘めるのではないかと説く。

こうした小玉による考察は、アクチュアルな事柄を問題にしながらか、それへのインプリケーションを提示し、思想哲学の問い直しがなされる。本書のシリーズ名である「今読む名著！」が指すように、本書はまさに現代的な課題を古典からひもとく契機となる非常に示唆に富むものであると言える。

### 〈参考文献一覧〉

- 小玉重夫、『難民と市民の間で』、現代書館、2013  
Arendt, Hannah. *The Human Condition*, The University of Chicago Press, 1958 (邦訳：ハンナ・アレント著『人間の条件』志水速雄訳、ちくま学芸文庫、1994)  
Arendt, Hannah, *Between past and future*, Penguin

Books, 1977 (邦訳：ハンナ・アレント著『過去と未来の間』引田隆也、斎藤純一訳、所収「教育の危機」みすず書房、1994)

Arendt, Hannah. *The origins of totalitarianism*, Harcourt Brace Javanovich, 1951, 1986 (邦訳：ハンナ・アレント著『全体主義の起原 I・II・III』大久保和郎、大島かおり訳、みすず書房、1972-1974)

石川良子『ひきこもりの〈ゴール〉—「就労」でも「対人関係」でもなく』青弓社2007

### 注

- 1) 小玉重夫『難民と市民の間で』現代書館、2013。なお、本書の引用は後ろに項数を記す。
- 2) 警察の管轄下の牢獄や収容所は単に不法と犯罪のおこなわれる場所ではなかった。それらは、誰もがいつなんどき落ち込むかもしれず、落ち込んだら嘗てこの世に存在したことがなかったかのように消滅してしまう忘却の穴に仕立てられていたのである。(『全体主義の起原』p.224)